



OPINION オピニオン・スライス SLICE

元五輪メダリスト/
大阪ガス近畿圏部地域活力創造チーム課長

朝原宣治さん

NOBUHARU ASAHARA

競技者からプロデューサーへ ～スポーツを通じたまちづくりへのチャレンジ～

— 400メートルリレー銅メダルを獲得した北京五輪について

準決勝でタイムは全体の3位。その実力を発揮すればメダルをとれる位置までできていました。当然、国民の期待も高まっていて僕らも絶対とらないといけなし、一生に一度訪れるかどうかのチャンスだから失敗も許されなし、かといって守りに入るとメダルはとれないし、そういうせめぎ合いで決勝までの間というのは物すごく重苦しい気持ちで過ごしていました。メダルをとった時は、とにかくほっとしたというのと、むちゃくちゃ嬉しい、いろんな気持ちが爆発したという感じです。

— 長い間第一線で戦い続けられたモチベーションについて

僕らは4年に1度ピークを迎えないといけませんが、そのピークが10秒間という一瞬で終わる競技なんです。そ

こに対してどういうモチベーションで向かっていったかという、いわば一番シンプルな「人間の限界を試す」ということですね。100mを走るということは、誰でもできるんですけど、誰もが速く走るということはできないという競技で、ごまかしもきかないし、自分自身にも向き合わないといけなし、あらゆるところを強くしないとなかなか強くない。しかし、そこを突き詰めていくのがすごく楽しいんです。自分の力、潜在能力をどうやったら引き出すことができるかとかね。そういうことを考えたり、そういうことに向かっていくということにすごくワクワクしました。

— 日本人が五輪の100メートルで金メダルをとるためには

これまででない発想が必要だと思います。僕達より速い選手というのはだいたい黒人選手です。したがって、手本にするのはやっぱり彼らしかないんです。でも、そもそも、

パワーも骨格も異なる彼らの真似をして上回ることができるかという、僕はちょっと難しいんじゃないかと思います。パワーとは別の何かが必要なんじゃないかと思います。

—— 現在の大阪ガス社員としての活動は

まず、大阪ガス陸上部所属の江里口選手というロンドン五輪の代表になった選手の指導・育成をしています。

それに、NOBY T & F CLUBという、大阪ガスのグラウンドを使った陸上クラブがあります。そこには小学生から40歳代ぐらいまでの会員が350名ぐらいいます。大人の方は自己実現や健康維持ですね。中・高・大学生は陸上をやっている方達です。

—— 朝原さんは走り方を教えているんですか

小学生にはあまり走り方は教えなくて、ボール運動もしますし、ミニハードルを使ったり、動物の動きを取り入れた地面を這うような動きなど、基礎的な体の動かし方とか色々な感覚を身につけてもらっています。

—— 大阪ガス以外での活動は

アスリートネットワークという一般社団法人の団体を、女子バレー元代表監督の柳本さんと5年前に立ち上げ、青少年育成とアスリートの自立を目指して色々な活動をしてきました。具体的には、僕達が経験してきた本物の感動を子どもたちに伝えようということで、たくさん子どもたちとイベントをやってきました。

—— アスリートネットワークとしてのその他の活動は

僕達の経験を戦略的にまちづくりなどに生かしたいと思っていたときに、スポーツと健康に特化したショッピングモール「もりのみやキューズモール」の企画話があったんです。そこに、アスリートネットワークがこれまでやった経験とかコンテンツプログラムを取り入れる活動をしています。

具体的には、そこにテナントの一つとしてアスリートネットワークラボというお店を運営しています。ラボでは健康にまつわる研究をする大学・企業と一緒に協働してプログラムを作るとか、商品開発にチャレンジするとか、あとは実際に身体のケアですね。トップコンディショニングと呼んでいるんですが、僕達アスリートが経験してきた体のケア、マッサージができる施設になっています。「もりのみやキューズモール」には、アスジョク（アスリート食堂）という健康食レストランがあったり、トラックがあったり、フットサル場もあったり、そういうのを集めてスポーツとか健康とか食というものを全部結びつけて連携して、来る人みんなを元気にしていきたいと考えています。

—— 若手の選手たちに対して望むことは

今ジュニアの選手がどんどん世界の大会に出ていって活躍していますので、若いときから経験を積んで、自信も持つようになってもらって、日本人は短距離では世界で戦えないという考え方を打ち破ってもらいたいというのがあります。

—— 国や支援する側に望むことは

東京オリンピックの招致が決定してから、かなり支援は厚くなったと思います。しかし、国としてはやっぱり思い切ったことはなかなかできないんですよ。企業でもそうです。前例がないことに対してどんとお金を出すというのも難しいし、人をつけるというのも難しいです。まず、スポーツを浸透させてやっぱりすそ野を広げるといのが大事でしょうね。

—— トップアスリートになるためにはエリート教育は必要ですか

必要ですけども、モチベーションとか怪我の問題とか色々なことがあるので、そこは本当にデリケートにやっていかなきゃいけないと思います。発掘というのも難しいですね。発掘も要は体力測定なんですけど、小学生の体力測定をすると、大体早熟な子が上位に来るんですが、そのような子は中学に入って全然伸びないというパターンがあるので、発掘の指標をもっと研究しないといけないと思います。

—— 大阪弁護士会にも運動会がありまして、結構怪我をしたりするんですが、素人アスリートにアドバイスがあれば

日頃の運動習慣が大事ですね。エレベーターを階段にするとか、あとは飲み過ぎない。それから、お風呂にきっちりつかってストレッチをして寝るだけでも大分変わってきます。僕も、家で腕立て伏せをしたり腹筋したりはしてますよ。そうしないと緩んできて、急に走ったりすると危ないので。

—— 地域の運動会で走ったりするんですか

走りますよ。

—— 他の人から苦情はきませんでしたか

だから、僕、現役時代はずっと断り続けてたんですよ。それで、引退してもうそろそろいいかなということで出たんです。何か文句言われるかなと思ったんですが、みんな応援してくれて。僕に対抗しようと、普段から走られてるランナーが挑んでくるんです。僕も普段そんなに動いてないんですけど、プライドもあるし、一応勝たなあかんしということで、出たら出たで大変なんですよ。負けられへんなど。

—— 弁護士・弁護士会に期待することは

弁護士の仕事は色々厳しいこともあるかと思いますが、多分困っている人たちを助けて感謝されることに喜びを感じる方が多いのではないかと思います。

スポーツの世界で期待するとすれば、例えば代表を決める選考会でもめることが多いですが、中央協会が色々な選考基準をちゃんと定めていない場合が結構多いんですよ。誰を代表に選ぶかというのは協会の独自の判断ということもあって、選手たちの権利は全く守られていなかったんですが、スポーツ仲裁ができてようやくよくなりました。そういったトラブルになったときに、身近に相談できる人がいればとは思っています。

(Interviewer: 三木秀夫、伊田真広 / Photo: 武田真実)